

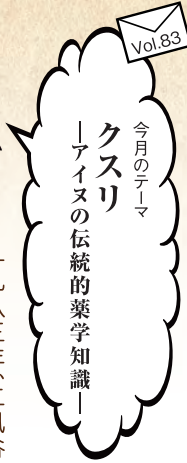


森の神々からいただいたてきた薬の威力。けど、なんと本当に咳が止まっちゃった。「これはレブニハツ(チョウセン)「ミン」煎じて飲んだら治る」って。半信半疑だったけど、なんと本当に咳が止まっちゃった。森の神々からいただいたてきた薬の威力。



本田優子
(札幌大学教授)

一九八三年、二風谷の萱野茂先生のお宅で居候をしていた頃、



今月のテーマ
クスリ

アイヌの伝統的薬学知識

ゆうこみゆき

なるほどアイヌ文化エッセイ

ソノコ de ソノコ

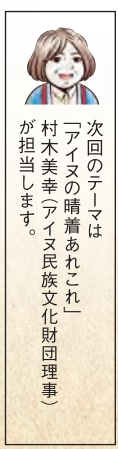


アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、
その魅力を交代で執筆する
ソノコ(=お便り)形式のエッセイです。



イラスト/ 莊田悠人

すごい、と感じ入ったものでした。萱野先生のアイヌ語塾では、森が大切な教室でした。ある時、先生は木の皮を少し削って「うまいぞ、食ってみろ」と子どもたちに渡したのです。喜んでかじった途端一斉に悲鳴。「ひえ〜〜」が〜っ! 萱野先生はその光景をみて笑いながら「これはニガキ。アイヌ語ではシウニ。日本語と同じで苦い木という意味。胃とか腹が痛い時の薬だからね」。そして私の方を向いて「本田ちゃん、人間、五感で覚えたことは一生忘れないものなんだ」って。今でも私の教育指針となっています。アイヌ語でも薬はクスリ。アイヌの人た



次回のテーマは「アイヌの晴着あれこれ」村木美幸(アイヌ民族文化財理事)が担当します。

ちの周囲にはたくさんクスリがありました。腹痛にはキンニスヒキの根っこの白い玉、麻疹はしかの時にはフキの根を煎じた汁、腎臓が悪くておしっこが出ない時にはエソニフトコetc…。近所のおじさんたちですら驚くほどの知識量。中でもひときり薬草について詳しいと言われていたフチ(おばあさん)から、「話を聴きにおいて」と言われながら、赤ん坊連れでの訪問をためらっているうちに、フチは先祖の国へと旅立たれてしまったの。今でもこのこだけは残念でたまりません。一方で、薬草のことをあまり口にしない知らないフチもいらっちゃった。「周りに生えている薬草に頼るのは、病院に行けないほどアイヌが貧乏だからだ。恥ずかしい」。アイヌの伝統的薬学知識はかけがえのない知的財産なのに、誇りを踏みじられた社会状況の中、いったいどれほどの知識が悲しみとともに封印され、失われたことでしょうか。本当に悔しい。



■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■莊田悠人(しょうだゆうと):平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。